

登山・登攀の記録

北アルプス 劔岳東大谷 G1尾根

日時:1959年1月1日

メンバー:高田直樹(L)、角倉光彦

概要:この登攀の後、厳冬期の東大谷は条例によって入ることができなくなったため、これは唯一の記録かもしれない。

これより前の積雪期の記録は、左俣、左尾根、中尾根の三つであり、いずれも春のものであった。中尾根の記録は、1950年4月の日本医科大山岳部によるもので、東大谷出合にB.Cをもうけ、芦峯案内人の佐伯文蔵をガイドに中尾根を登った。しかし、厳冬期ともなれば、記録は絶無であった。

私たちが、地形さえ未知の部分を残すこの谷のことをよく知るようになったのは、1957年春の滑落遭難事故の遺体捜索のための六回にわたる捜索活動によってであった。4月5月のデブリの状態から考えて、上部の小さな雪崩も幅の狭いこの谷では、すぐに大きなものとなり出合近くまで押し出すものと考えられた。

谷筋を通って取り付く下からのアタックが、深いラッセルと雪崩の危険を含むのに反し、別山尾根より中の左俣を下って取り付くのは、ごうごうと吹き上げる吹き上げる北西風によって雪はコンクリートされ、条件さえつかめばかなり安全であると考えた。(この仮説を立てるには、芝山君遭難の翌日、尾鍋先輩とともに前劔沢のつめより、東大谷に下ろうとしたときの知見が役立ったといえる)

また、学年により実力差を有する大学山岳部にとって、ポーラー・メソッドは、個人の実力向上を目指すのに有利と考えられた。

早月尾根を登り、アタックキャンプを平蔵のコルに置くことにした。

1958年度冬山合宿の目的とされたこの計画は、山岳部全員の力によって成し遂げられた。

高田以下10名は、12月16日京都をたち、17日早朝上市着。19日馬場島 B.H.にはいる。中間デポをつくって荷揚げを繰り返し、23日には、全員が早月尾根2100m地点のC1に入る。25日2600mにC2を建設。ここにアタックに向かうための基地ができた。28日、吹雪のやみ間をねらって、高田は一年生の林と共に、ガスの中を頂上までのルート偵察を行った。

12月30日、高田、角倉のアタック隊は、新人を含む部員の劔山頂までのボッカサポートを受けて、早月尾根を登り雪の詰まった平蔵避難小屋に入った。1日待機の後、1月1日東大谷 G1 の厳冬期初登攀に成功した。

この登攀は、京都新聞にも全面記事として、大きく報じられた。山岳部全員の力の総結集があつての成功であった。この合宿の後半には8人ものOBが参加した。ある山岳雑誌の編集子が誌上でコメントしたように、「OBの参加は心強かった」といえる。

記録

1959年1月1日(高曇り後吹雪)

平蔵のコル(9:00) - G1取付(12:00)

- 登攀終了(15:00) - 平蔵のコルA, C,

昨夜除夜の鐘をきいたのがたたり、目が覚めると8時。外に出ると高曇りで、後立山も富山湾もはっきり見え、気温高く西の山には片積雲がかかっている。天気はまもなく崩れるだろう。だが雪の状態はよく、深いところでもすねまで

もぐらない。

今日を逃しては見込みは無いと大慌てで出発。別山尾根をたどる。

中の左俣を下る。最上部の「門」は雪が吹き飛んでガレがでている。雪はよくしまっており、仮説が実証されたようでうれしかった。切り立った側壁と急斜面に気味が悪くなり、ザイルをつけた。チョックストーン滝の上部約5mは、青

登山・登攀の記録

氷に雪の乗った状態でカッティングを強いられた。滝は4mほど出ているのでハーケンを打ってアップザイレン。気温が高い為か見上げる側壁からエビのシッポがさかんに落下して来る。

下るに従い雪深く太股くらいになり、雪崩の危険も感じられたのでG1に取り付くことにする。G1の3本目の側稜の下より、主稜に食い込むかなり急な堅雪のルンゼを3ピッチ登り主稜に出た。

この頃より雪が降り出す。G1はこの辺りでは急峻な雪壁をなしており、不安定な雪なのでダケカンパにぶら下がってずり上がる。ここを登りきると3本目の側稜上にでた。2本目の側稜の雪をつけない黒々とした姿が見えた。大体G1の主稜は、はっきりとせずむしろ中の左俣へ荒々しくなげ落ちる側稜の上部によって形造られているように感じられる。

次に2本目側稜、主稜間のルンゼに入りシャフトをきかせキックステップで2ピッチ上る。二人はトップを交代しながら、黙々と高度をかせぐ。悪化する条件による焦りがあった。この頃より完全な吹雪となり盛んに塵雪崩をかぶる。ルンゼの状態は悪くなり、下はスラブ状の岩らしく、アイゼンが鳴るので左にトラバースし、主稜に出たが、前をノッペリした岩にふさがれた。左に走る幅10cm位のバンドの岩に頬をすりつけながら、きわどいバランスで数メートルトラバース。主稜左側の小ルンゼに入る。ここは薄いクラスト下が粉雪でアイゼンはきかず打ち込むシャフトは半分も入らず、スピッツェがガチガチ鳴るばかり。左手でハイマツを掘り出してホッとす。

このルンゼを約30m つめ、左上にトラバースし、40m いったいで尾根状の所に出た。

ここで初めて休み、ヒツトビー、チーズなどをかじる。すぐ出発。次々と現れる小オーバーハングを強引に乗越し1ピッチ登ると2本目側稜ジャンクションとおぼしきところに出た。

上部はピッケルで突けば穴があきそうに思えるほどのうすいナイフリッジをなしている。

更に2ピッチ、オニギリを重ねた様な感じの岩をエビノシッポを払いのけながら登ると1本目側稜ジャンクションに出た。

ここより上部に於いて、これまではっきりとしなかった主稜は傾斜がやや落ちると共に、丁度刃こぼれした庖丁のようなナイフリッジを呈する。

このナイフリッジをG2側に巻こうとして雪面をトラバース中、胸元より雪崩が発生し身体は重心を失った。スローモーション映画の如く後ろにのけぞりながら、手だけは素早く動きシャフトを下より表れた旧雪に打った。幸いシャフトは良くきいてくれた。

早月尾根の方より吹き付ける横殴りの雪は烈しさを加え互いの声は聞こえない。勘でジッヘルポイントを決めザイルを引いて合図するとセカンドが舞い上がる雪の為ほとんど手探りで登ってくる。

1本目側稜ジャンクションより左へ20mほどトラバースし、不安定な大きな岩塊の間をぬいながら、真直ぐ上へと数ピッチ登った。

突然前が開けた。そこでG1は終わりだった。15時10分、予期せぬ速さだった。二人はバリバリに凍ったオーバー手袋で肩を叩きあい、氷片の張り付いた顔を覗き込んで何かを怒鳴りあったが、それは言葉にならなかったし聞き取れもしなかった。(高田直樹記)



(アタック隊サポートを終えて早月尾根を下る)